# 続・エマスンの詩について——序説

尾形敏彦

本稿は『エマスンの詩について——序説』の後半である。エマスンの詩論は、他の諸論におけると同じく、自然を媒体にして、宗教路線上からふみはずさない直線的なものである。時代的、地域的な影響から、思考の進め方には経験的、実際的な面が見られるが、エマスンの詩の世界は、結局、上昇するイデアだけがあって、たとえば、物質世界への同時下降というようなことは考えられていない。本稿も前稿のように、かれの詩以外の全作品から詩に関する重要な章句を選び出したものである。

## 九　詩人に与える書物の影響

直観を重視するエマスンは書物を第二義的に考えている。「学者の精神に影響を与える第二のものは過去の精神である。——文学、芸術、制度など、人びとの心が刻まれているものならば、形式はどのようなものでも、そのなかに過去の精神が記されている。書物は過去の影響をもっともよく現わしているもので、おそらく、書物の価値だけを考察することで真実に到達し、過去の影響がどれほど大きいかを容易に知ることができるであろう。」[1]

そして、書物の使用法については、「書物は、善用すれば、これほどよいものはないが、悪用すれば、きわめて悪いものになる。それでは、正しい使用法とはいかなるものであろうか。あらゆる手段がめざす目的とはなんであろうか。書物は、読者に霊感を与えるためのもので、その他のことには役に立たないと思う。書物が、その引力でわたしを歪めて、わたしの軌道外に追い出したり、わたしを惑星ではなく衛星にしてしまうくらいならば、むしろ書物を読まないほうがいいと思う[②]」と言う。また、「われわれは書物を重視するが、賢人こそもっとも書物を尊重する人である。われわれは読書と談話を通して伝統に負うところ絶大であり、われわれが唱える異説や添加は言うにたりないほどまれで、——しかも、それはたいてい他のものを読んだり、聞いたりしたものにもとづいているのだが——広い意味で、世のなかには純粋な原作はないと言えるほどである[③]」と書いている。そして、エマスンは書物と同じく実際の生活というものを重視している。

「人は考えるかと思うと行動し、一つのはずみが別のはずみを生み出す。芸術家が材料を使いはたしたとき、絵を描く想像力が枯れたとき、思想が理解されなくなり、書物がただ退屈なものになったときでさえも、いつでも、芸術家は生活するというよりどころをもっている。人格は知性よりも高度のものである。思考は機能である。生活することは機能の実現である。流れはその源泉へ帰ってゆく。偉大な心霊をもつ人は力強く考えると同様に、力強く生活するであろう[④]。」

（注）

① *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, ed. Edward Waldo Emerson, Vol. 1, p. 87.

② *Ibid.*, pp. 89-90.

③ *Ibid.*, Vol. 8, p. 178.

④ *Ibid.*, Vol. 1, p. 99.

## 一〇　特定の詩人について

本稿に関する限り、きわめて不備である。なぜならば、エマスンが詩人の個人名をあげた部分を整理したわたしのカードはここに引用するにはあまりにも多すぎるからである。ここでは、かれの日記から若干の例をあげるにとどめる。かれにはテニスンに関する言及が比較的多い。たとえば、その主なものはつぎのようなものである。

「テニスンの第二詩集を読んだが、第一詩集と同様に楽しく、これにたいするわたしの批評も前と同じである。かれはシェイクスピアに心酔している。シェイクスピアのなかに生まれ、洗礼を受け、育ったと言えるが、それにもかかわらず、独自のユーモアと独創的なリズムと音楽と象徴とをもっている。[①]」

「ボストンでテニスンの第二詩集の新刊を見た。これには多くの価値があるとしても、はたして、真の『価値』があるかどうかは疑問であろう。しゃれ者の詩とでも言うのがよいだろうか。限りなく美しいが、偉大な叙事詩的筆致は見当らず、純粋に自然の影響だと思われるようなところは、あまりにも威勢よく取り除かれていると思う。[②]」

「テニスンは韻律の名人だが、それは素晴しい機械的なつくり方の秘伝を学んだ芸術家として巧みだという意味においてである。かれには森の調べというものがない。教育のもつ危険は大きいと思う。[③]」

「テニスンは庭園で霊感を得たように思うが、庭園のないわが国では、あの麝香のかおりのする詩は生まれないであろう。[④]」

「テニスンは詩人というものの美しい半面を代表している。[⑤]」

「テニスンの詩の多くは、かれの初期の作品『クララ・ヴィア・デ・ヴィア夫人』のように雑誌に見うける詩のすぐれたものにすぎない。——その月のアトランティック・マンスリーへの立派な寄稿であっても、古典的な永遠的なものではない。こういう作品にたいしては、ミルトンが読んだら、さぞ眉を逆立てて怒ったことだろうと思う。しかし、テニスンの詩『ユリシーズ』ならばミルトンも認めたであろう。[6]」

「叙情詩人としてのテニスンにたいする賞賛を制限するものは、かれが現存の詩人だということだけである。もし、かれが古典作家であったら、無条件に賞賛できるであろう。[7]」

しかし、もちろん、エマスンが尊敬している詩人は、かれが『代表偉人論』でとりあげている詩人シェイクスピアであり、作家ゲーテである。また、ミルトンやダンテにも高い評価を与えているが、これについては紙数の都合でここではふれない。以下、詩人名をあげている重要な文章を引用する。

「大学ではシェイクスピアを研究すべきである。フロレンスではボッカチョが大学教授に就任してダンテの講義をうけもった。しかし、イギリスのオックスフォード大学でも、ここのハーバード大学でも、シェイクスピアの講座があるという話を聞いたことがない。しかし、学生は偉大な詩人たちの思想を知識として知るだけではなくて、感じとるように教えられなければならない。[8]」

「スウェーデンボルグ王について言うならば、悪は罪としてさけるべきだとわたしは思う。かれの道徳上の基本的立場にはわたしは反対である。わたしは説教をするのがきらいである。わたしは悪を悪としてさける。詩的な心をもつものは、みな異教徒で、今日まで、オリンパス山のエホバ、アポロ、ミューズ、運命の女神たちを、カルヴィンや野蛮な中世の消化不良よりも好むということを——チャールズ・ラムは知っていたが——かれは知らないのであろうか。[9]」

「わたしは真夜中に『リシダス』を読んで慰められた。あの古典的牧歌のもつ大理石のような美しさはどうであろうか。わたしはあの詩が与えてくれる喜びを分析したものを見たくてたまらない。[10]」

「今朝、ライダル山へワーズワースを訪ねた。……詩人というものは、いつまでも若いものだ。この老人が自作の十四行詩を吟誦するために記憶をたどる様子は、かれが十七歳の頃にでもしたようなしぐさであった。[11]」

「ダンテが二、三行語ると、わたしはかならず、かれがきわめてすぐれた目をもっていたことを知らされる。たとえば、つぎのような句である。――

『暗黒の半球を征服する火』

幾百万の人びとが、生涯、ろうそくやランプの光や遊星を見ていても、この『暗黒の半球を征服する』ほどの照らす力には気づかなかったであろう。しかも、ダンテは自分の目についてはなにも言っていない。[12]」

「ほとんどの人びとは支払不能者とでも言うのだろうか。顔つきや話しぶりや、はじめの意気ごみを見ていると、いかにも実際以上のことができそうに見える。チャールズ・ニューカムがそうであったし、コールリッジもカーライルもそうであった。[13]」

そして、本質的に自然の音楽を愛するエマスンはソーロウの詩を高く評価する。「昨晩、ソーロウが『同情』という美しい詩をとどけてくれた。詩的なところのないアメリカの森から、これほど純粋で高尚な調子が響いたことは今までにないと思う。……ソーロウの詩を聞いていると、やはり、『これを聞け』と言いたい気になる。[14]」

詩人エマスンは思想を音楽よりも重視したが、それは比較しての問題である。「あの有名な『詩篇第五十一』が今日の午後、シスチン礼拝堂で歌われた。どこの唱歌隊でも、世界中のどこの礼拝堂でも、この合唱の真似はできないとローマでは言われている。オーストリア皇帝がウィーンでもそういうふうに歌わせたいと思ってモー

ソナルトをローマに派遣したが無駄であった。たしかに甘美な音楽である。その音色は風琴のものになによりも似ている。」

（注）

㊀ Journal, 1838. 3. 18.

㊁ Ibid., 1842. 6.

㊂ *Journals of Ralph Waldo Emerson*, ed. Edward Waldo Emerson, Vol. 7, p. 36.

㊃ *Ibid.*, Vol. 8, p. 296.

㊄ *Ibid.*, Vol. 9, p. 561.

㊅ Journal, 1857. 4.

㊆ Ibid., 1869. 10.

㊇ Ibid., 1864. 4.

㊈ *Journals*, Vol. 3, p. 501.

㊉ Journal, 1833. 1. 16.

(十一) Ibid., 1833. 8. 28.

(十二) *Journals*, Vol. 7, p. 433.

(十三) Journal, 1857. 2.

(十四) *Journals*, Vol. 4, p. 69.

(十五) Journal, 1833. 4. 3.

## 一一　行動について

エマスンは行動の重要性をいたるところで説いているが、かれの詩論においてもそれは現われている。たとえば、「真の学者は行動の機会が過ぎ去ってゆくのを、力を得る機会を失ったかのように感じて残念がる。行動は原料で、知性はこの原料から輝く製品を作るのである[1]」と言い、「ただ語彙を増すためにだけでも学者は熱心に行動を求めるであろう。人生はわれわれの辞書である。数か年を田舎で労働するのもよし、町で商売や工場にたいする眼識を養うとか、多くの男女と卒直に交際したり、科学や芸術にたずさわるのもよい。いずれもわれわれが知覚したものを証明し具象化する語彙を、それらの事実によって習得するという目的に役立つのである。……行動の窮極的価値は書物の場合と同じく、いや、書物の場合より以上に、行動は資源だという点にある[2]」と語っている。そして、行動を起こさせる力は意志の力だと述べている。「意志の力は崇高なこともあるが、非常時に際してわれわれを助けられないとすれば、その存在価値はどこにあるだろうか[3]」と述べて、意志の力が非常の時にわれわれを助けるものであると説き、「武装した人間だけが英雄だろうか。人間は銃床かボーイー刀の柄にすぎないのだろうか。考え深い人は敵意を押さえ損なうものである。それは、かれらが他人のよろいを身につけているからである。これからは外国の方法や勇気を辞退させ、かれらにできることをさせるべきである。自分たちの弱さではなく、自分たちの力で戦わせるべきである。考え深い人は、よろいではなく、これ――専心努力ということ――が必要なのだとわたしは思う[4]」と語り、「講演と作法の美しさは思想にのりだすことと、自分を忘れることにあるとわたしは思う[5]」と言った。

しかし、行動に際して、エマスンはつねに慎重さの必要性にふれることを忘れない。「不愉快な少年時代がす

ぎて成人になろうとしているが、青春のかぎりない歓喜や楽しい遊戯や金髪と輝く眼などはわたしにとってはなんであろうか。そうしたものがもつ魔力からわたしは身を引きたい。厳粛な声が身を引けと命じている。[6]」あるいはまた、「人は自分の才能で作った輪の周囲を走りまわって、それを賞賛し、世間との関係を失ってしまう。これはすべての人間にみられる傾向である[7]」とか、「この先導者に従いなさい。どこへ行くかをあまりうるさく聞いてはいけない。従うことが仕事だからである。もし、それが過度や不平等や個人主義にあなたを導いたとしてもいいではないか。それでも、それに従うべきである[8]」と語り、「まぜあわせるときに、ほんの少しでも不平等があるとか、ある要素が他の要素よりも多すぎるとかは、その程度に応じて、ものごとを透明でなくし、観察者にたいして世界を不明瞭なものにし、かれの体験の価値を破壊しさえもする[9]」と言って、行動に際しての慎重さを要求している。エマスンの場合には、もちろん、行動とは精神的行動にほかならない。「思想は行動の種子である。しかし、思想を行動の第一の形とすれば、行動は思想の第二の形とも言えよう。思想が生まれるのは、それが発表され、実行されるためである。……言語に現わすことは大きな喜びであり、行為に示すことも大きな喜びである。[10]」

（注）

① *Works*, Vol. 1, pp. 95–96.

② *Ibid.*, pp. 97–98.

③ *Ibid.*, Vol. 8, p. 283.

④ *Ibid.*, Vol. 10, p. 274.

⑤ *Ibid.*, Vol. 12, p. 77.

⑥ Journal, 1825. 1. 4.
⑦ *Works*, Vol. 6, pp. 132–33.
⑧ *Ibid.*, Vol. 12, p. 86.
⑨ *Ibid.*, p. 330.
⑩ *Ibid.*, Vol. 7, p. 38.

## 一二　重要な発言

エマスンの詩論の核心をなすと思われる文章はつぎにあげるものである。

「そのうちに、たちまち、前ぶれなしに真理が姿を現わす。さまようような光が現われる。それが、われわれの求めている本質であり、原理である。しかし、神託が現われてくるのは、われわれがあらかじめ真理の神殿を包囲したからである。[①]」

「すべての人びとは、自分の身に起こったことを話してきかせることができる程度には芸術家でなければならない。しかし、われわれの経験では、光線や接触は感覚に達するだけの力を十分にはもっているが、骨髄にまで達し、言葉のうちに自分を再現させるという力をもってはいない。詩人の場合には、こういう力が均衡していて、障害になるものがなく、他人が夢想したものを、目で見、手でふれ、その足跡は経験の領域全体にわたっている。最大の力をうけ、また、それを与える者であるために、詩人は人間を代表するのである。[②]」

「詩人とは、語る者、名づける者、美を代表する者である。かれは君主で、中央に座を占めている。世界は彩色され、飾られているのではなくて、最初から美しい。神が美しいものを創造したのではなく、『美』が宇宙の

創造者だからである。それゆえに、詩人は、主権者になるのを許されるのではなく、帝王になる権利を自分でもっているのである。[3]」

「詩人はまた、気分に身をまかせ、心をゆさぶった思想を、もとの思想とよく似ているが、まったく新しい形で表現する。表現は有機的である。すなわち、事物が解放されたときにとる新しい形が表現なのである。日光のなかで、対象が、その映像を網膜に描くように、対象は、全宇宙が熱望するものを熱望して、その精髄の写しを、網膜の場合よりもはるかに精巧に、詩人の心のなかに描こうとするのである。事物が一段と高い有機的な形に変わるように、事物は詩人の心のなかでは旋律に変わるのである。すべてのものには、その守護神である魂が存在する。そして、事物の形が目にうつるように、事物の魂は旋律にうつし出される。……詩は自然のなかに記された原典の不完全な翻訳であり、元来、本文と一致しなければならないという信念があればこそ、批評活動は放縦にならず、正当性をもつのである。[4]」

「詩人たちは、このように、人間を解放する神たちである。人間は新しい感覚を実際にもつようになり、自分の世界のなかに、別の世界、多くの世界の巣を発見したのである。[5]」

「詩人たちは、このように、人間を解放する神たちである。[6]」

「詩人こそ、詩であれ、行動であれ、表情や態度であれ、なんらかの形で、われわれに新しい思想を与える独創者である。詩人は、われわれの鉄の鎖の鍵をあけ、われわれを新しい眺望のなかへ入れてくれる。[7]」

「詩人は、疑惑をいだかずに、あくまでも主張しなければならない。『わたしのなかにあるのだ。胸のなかにしまっておくわけにはゆかない』と言わなければならない。動揺することなく、立っていなければならない。[8]」

「芸術家に、ほかのいかなるものでもなく、まさに現在あるようにつくらせた偉大な信念を、その作品のなか

に見抜くべきである。些細なことや、かれが、なさないでおくこともできたというようなことではなく、そのとき、そこで、かれによって、なされなければならなかったことを見抜くべきである。[9]」

「霊感とは、人間を作りあげる神のたゆみない努力である。[10]」

「すぐれた文章の原作者につぐものは、その第一番目の引用者である。書物を読む者は多いが、そのなかの句を引用するという考えは起こらない。ひとたび誰かが引用すると、その一行は東西で引用されるようになる。また、借用にもいろいろな方法がある。天才は立派に借用する。[11]」

（注）

① *Works*, Vol. 2, p. 332.
② *Ibid.*, Vol. 3, p. 6.
③ *Ibid.*, p. 7.
④ *Ibid.*, pp. 24-25.
⑤ *Ibid.*, p. 30.
⑥ *Ibid.*, p. 32.
⑦ *Ibid.*, p. 33
⑧ *Ibid.*, p. 40.
⑨ *Ibid.*, Vol. 10, p. 255.
⑩ *Ibid.*, Vol. 12, p. 59.
⑪ *Ibid.*, Vol. 8, p. 191.

## 補遺一

「われわれの人生のどのような事件、どのような事実でも、いずれは、地上を離れられない不活発な幼虫の形をすてて天上へ舞いあがり、われわれを驚かさないものはない。揺籃時代と幼年時代、学校と運動場、少年たちと犬、教師のむちにたいする恐怖心、少女やいちごにたいする愛情、その他、かつて大空をみたしていた多くの事実はすでにない。友人と親類、職業と党派、都会と田舎、国家と世界などもかならず舞いあがり、歌い出すのである。[1]」

「高貴で美しいもののかわりに、手近なもの、粗野なもの、ありふれたものが探しだされて詩に歌われた。珍しいものを求めて遠国へ旅するために馬の仕度をして食糧を携えた人びとによって、今まで無屯着に足下にふみつけられていた場所が、突然、外国よりも趣きの深いものだということがわかる。……わたしは偉大なもの、はるかなもの、浪漫的なものを求めない。イタリアやアラビアで行なわれているもの、ギリシアの芸術やプロバンスの楽人の歌を求めない。ありふれた平凡なものを胸にいだき、手近なもの、粗野なものを探し求めて、その足下にひざまずくのである。[2]」

「(世界には些細なものや不可能なものはなく、ひとつの計画が遠くの峰と低い堀とを結んで活気づけているという)この考え方がゴールドスミス、バーンズ、クーパー、近代においては、ゲーテ、ワーズワース、カーライルなどの天才に霊感を与えたのである。この考えに、それぞれ従って、かれらは成功したのである。かれらの著作に比較するとポープ、ジョンスン、ギボンの文体は冷たく衒学的に見える。前者のものには血のあたたかさがある。手近なものが遠いものに劣らず美しくすばらしいのを知って驚く。近いものは遠いものを説明する。一

滴の雫は小さな大海である。一人の人は自然全体と関連している。このようにありふれたものの価値を知る人は多くのものを発見する。ゲーテはこの点で近代人のなかでもっとも近代的な人だが、誰よりも古代人の精神をよく教えてくれる。[3]」

「人生の法則は些細な日常行為の裏にかくれていて、すべての行為はこの法則にしたがう実験である。学者も普通一般の荷物の分け前を担わなければならない。家庭人と共に働くべきであり、書物のなかの人名と共に働いてはならない。かれの必要品、食慾、才能、愛情、学芸などは、かれのために人生の美しい博物館を開く鍵である。かれはアラビアの物語を読むように、人生の博物館を読みとりながら、自分の脈うつ胸に、そのよい味と辛辣な味とをうけとらないのはなぜだろうか。愛憎、所得、貸借、損失、病気、苦痛、求愛、礼拝、旅行、投票、注目、顧慮、恥辱、軽蔑などから、平静で美しい法則によって、われわれが学ぶべきものが生まれるのである。[4]」

「謙遜に論題を選ぶならば、真の威厳の多くが失われるというようなことは理由のない心配である。[5]」

「フルートランズの哲人たちは、人間と自然がもつ詩的趣味を無視した道徳の偶像を描いている。人間生活のなかのごく貧しい田舎くさいところにも見られる詩的趣味、男の帽子や子供がもつさじを照らす光、ひとつの波や塵にも宿る輝きなどをかれらは見ないのである。[6]」

「芸術とは、細かいところの美しさを愛する目で、全体をいつも注目することである。[7]」

「わたしはひどく寒い北緯四十二度の郷里よりも北緯三十七度の場所のほうが好きだ。船はおだやかな今日一日を時速一ノットか二ノットでゆっくり進んだ。ほかの船客たちは誰も楽しんでいないのに、わたしはなぜ楽しいのだろうか。わたしはなにも記録しなかったし、ろくに書物も読まず、これといってなにもしなかった。それではなにがあったというのだろうか。空と海と人間が一体になったこの美しさを楽しむのに、わざわざろうそく

をつけて、微小な自分を神の世界に塗りつけなければ楽しめないようなつまらない悪人になる必要がどこにあろうか。わたしはそんな人間ではない。わたしは、楽しむ資格がなくても楽しもうと思う。[8]」

（注）

① *Works*, Vol. 1, pp. 96–97.
② *Ibid.*, pp. 110–11.
③ *Ibid.*, p. 112.
④ *Ibid.*, pp. 177–78.
⑤ *Journals*, Vol. 2, pp. 167–68.
⑥ Journal, 1843. 3.
⑦ *Journals*, Vol. 9, 528.
⑧ *Ibid.*, Vol. 8, p. 72.

## 二

「作家は他の芸術家のように、無限の世界に乗りだして『渾沌』と古い『夜』に通ずる道を作るのである。かれの話を聞いた人びとは激しい創造的な喜びを感じて、かれの後を追うのである。[1]」

「ミルトンやバーンズやブライアントがこの世に生きていると、われわれは変って行く空模様や霧や雨や、もの淋しい曇り空や、表現しがたい暁や、不滅の星空などにたえて、それらを愛することができる。もし、詩人が一人もこの世に生き残っていないと信じたならば、自然はひどく退屈に思われるであろう。[2]」

「より崇高な、霊的な要素があることこそ、美を完全なものにするために必要である。崇高で神聖な美は、これを愛してもけっして弱くはならないものであって、人間の意志と結合したところに生ずるものである。美は、神が徳のうえにつける印である。自然になされる活動は、すべて美しい。英雄的な行為はすべて立派で、その行為の行なわれた場所と、これを見ていた人びとを輝かしいものにする。[3]」

「世界の美を考察するためには、もう一つの面がある。すなわち、美が知性の対象になるときである。事物は、徳にたいする関係のほかに、思想にたいする関係を持っている。知性は神の心のなかにあって、感情の色彩をおびていない事物の、絶対的な秩序を追求する。知性の力と行動の力は、交互に続いておこるようにみえる。……美は、行動との関係においては、すでに述べたように、求められないで現われ、求められないからこそ現われるのであるが、知性がこれを理解し追求するために、とどまるのである。つぎに行動がこれを理解し追求するために、とどまるのである。神聖なものは死滅することがない。すべてのよいものは、永遠に、新しく生み出す力をもっている。自然の美は、人間の心のなかに美を再現するが、それは実を結ばぬ思考のためではなく、新しい創造のためである。[4]」

「詩人は、少ない筆数で、空中に描くように、太陽、山、キャンプ、都会、英雄、少女などを描くが、それはわれわれが知っているものとかわりないが、地上よりも高くあげられ、目前に浮いているように見えるだけである。かれは、陸と海を地球からひき離し、中心思想の軸のまわりに回転させ、新しく配列しなおす。詩人自身、英雄的な情熱にとらえられているので、物質を情熱の象徴として用いる。官能的な人は思想を事物に従わせるが、詩人は事物を思想に従わせる。前者は、自然は根をはっていて微動もしないと考えるが、後者は、自然を流動的なものと見て、自分の存在を、自然のうえに刻みつける。かれにとっては、人の手におえないこの世界は、従順

で柔軟性をもっている。かれは、ちりや石に人間性をまとわせ、これらのものを『理性』の言葉にする。想像力とは『理性』が物質の世界を利用する力であると定義してもよいであろう。シェイクスピアは、すべての詩人にまさって、表現に自然を従わせる力をもっている。かれの帝王のように威力のある詩神は、天地を玩具のように手だまにとり、これを利用して、心に浮かぶ気まぐれな思想でも具体化してみせる。微妙な、精神的な結合によって、自然のもっとも遠い場所を訪れたり、遠くはなればなれになっているものを集めたりする。われわれは、物質の大きさは、相対的であり、すべてのものは、詩人の情熱に仕えるために、縮小したり、拡大したりすることを知らされる。このように、詩人は、そのソネットのなかで、小鳥の歌、花のかおりと色とを、かれが愛する女の『影』だとみるのである。女をかれのもとから遠ざける時間は、かれの『胸』であり、彼女がよびおこした疑いは、彼女の『装い』である。[5]」

「詩人は、自分の思想によって、自然に生気を与えるが、詩人と哲学者とのちがいは、詩人が主要目的として『美』をかかげるのにたいして、哲学者は、『真』をかかげるということだけである。しかし、哲学者も、詩人同様に、事物の外観上の秩序と関係を思想の王国よりもあとまわしにする。プラトンによると、『哲学の問題は、一定条件のもとに存在しているすべてのもののために、無条件で絶対的な基盤を見いだすことにある』のだが、この考え方は、一つの法則がすべての現象を決定し、この法則がわかれば現象を予測できるという信念から出ている。この法則は心のなかにあるときには、一つの観念である。その美しさは無限である。真の哲学者と真の詩人とは同一のものである。そして、真である美と、美である真が両者の目的である。[6]」

「世界は神の御手のなかにあったときには、神の思うままに形を変え、流動的であったと同じように、われわれが神にひとしい心をもって、この世界に対処すれば、その心に応じて、世界はわれわれの思うままに形を変え、

流動的になる。無知な人と罪のある人にとっては、世界は火打ち石のように堅く冷たいものである。こういう無知な人や罪のある人は世界に順応しようとするが、自分のなかにもつ神の性質の割合に応じて、大空はかれの前に流動し、かれの影と形をとるのである。[7]」

「神聖な詩人たちは、わたしの徳、理知、力の友人たちである。かれらは、わたしの心のなかにきらめく輝きが、わたしのものではなく神のものであることを告げ、かれらも同じ輝きをもち、天の幻に背いたことはなかったと戒めてくれる。そのために、わたしはかれらを愛する。かれらはわたしに崇高な感動を与え、悪にさからい、世界をしたがえ、『存在する』ようにと誘う。こういうように、イエスは、神聖な思想によって、われわれに仕えるのであって、これ以外の方法によるのではない。奇蹟によって改心させようとすることは、魂の冒瀆である。真に改心すること、真のキリストになることは、現在でもいつの時代でも、美しい感情を受けいれることによってなされるべきである。[8]」

「この魂の美に心を奪われた人は、魂の美の祭司、あるいは詩人になる。この祭司や詩人の任務は世界のはじまりと同じく古いものである。しかし、この任務には、条件、すなわち、精神的な制約があることに注意しなくてはならない。精神だけが教えることができる。神を冒瀆する者、肉欲に耽る者、嘘をつく者、自分をもてない者はだれも教えることができない。持っている者だけが与えることができ、存在する者だけが創造することができる。魂が天上よりおりて、その人を通して語る人であってはじめて、教えることができる。勇気、憐憫、愛情、知恵は教える力をもっている。あらゆる人は、これらの天使に向かって、扉をあけることができる。そうすると天使たちは、かれに言葉の賜物をもってくるであろう。[9]」

「学者は報酬という問題に熱心すぎて、仕事を怠ることがあってはならない。市場における成功は報酬如何に

よるが、真の成功とは実行そのものであることを学者は知って欲しい。ひそかに自分の意志に従い、事物の状態を知るために、つねに、勉励し、討究し、あらゆる手段を利用し、生活の日常的な務めと必要とを尊重し、さらに、世間の人びとのいうことを聞き、思想と生活の相互作用によって、思想を堅実に、生活を賢明にして、今日の世評の騒がしい饒舌を軽蔑することによって、世界の秘密を知ることができ、真にその秘密の扉を開くべき熟練が獲得されることを学者は知って欲しい。[10]」

「詩人は吟誦家でなければならない。詩人の霊感は一種の光栄ある遭難者でなければならない。かれの霊感のなかの意志は、『普遍の力』にたいする降服でなければならない。そして、『普遍の力』は面と向かって仰ぎ見ることはできないが、受けいれられ、共感をもって認識されなければならないものである。[11]」

「神話の声には神聖なものがこもっている。それは作者の意志以上の思想からでている。それこそ作者のもつものの精華で、私意を含まないものであり、作者自身も気づかず、かれの本質から湧き出したものであり、ことさらに工夫され考案されたものではない。それは一人の作家を研究しただけでは容易に見出だせないだろうが、多くの作家を研究すれば、かれらすべてに共通する精神として抽き出せるものである。[12]」

「われわれには現実というものがあり、適当な位置があり、性にあった義務がある。その上に浮かぶすべてのものに生気を与える知恵と力の流れの真中に身をおきなさい。そうすれば、苦もなく真理と正義と完全な満足の方向へ押し流されて行くからである。[13]」

「われわれは連続、区分、部分、分子のなかに生きている。また、人間のなかには宇宙の聖霊が存在している。賢明な沈黙、各部分、各分子が平等の関係をもっている普遍美、すなわち、永遠の『一』というものがある。……太陽、月、動物、樹木というように、われわれは世界を個別的に見ている。しかし、これらがその輝く部分

になっている全体が聖霊である。そして、その『霊知』によってのみ、時代の運勢は読みとられ、よりすぐれた思想に頼ることによって、また、各人が生まれながらもっている予言の精神に従ってのみ、われわれはその霊知の言葉を理解できるのである。[14]」

「詩の奇蹟について。たしかに、奇蹟はひとつしかない。存在し生成するという永遠につづく事実、やすみない噴出、一般から特殊への移行、この奇蹟は、そのもっとも普遍的な名として、『神』という言葉をもっている。『自然』や『芸術』のなかのなにかひとつの事実から、好きなところへ一歩か二歩、または三歩も踏みだすと、われわれはこの事実に出会うだろう。森を横切って好きな方向へ進み、さらに真直ぐに進めば海へ出るように。[15]」

「われわれは年をとるにつれて、あらゆるロマンスを、人生でもっとも優美なものを、子供たちにまかせて、自分たちには散文だけをとっておくが、これは残念なことである。ゲーテは晩年に恋愛をしたが、わたしもやさしい上品な感情の感受力を失いたくない。わたしの人生は五月祭の遊戯だ。自分勝手に生きてゆこう。固苦しい退屈な社会的習慣や様式はご免こうむりたい。空は青く、森と野は緑、泉は新鮮で、川は楽しげに流れ、太陽と星の輝きは、わたしをあたたかく迎えてくれる。わたしは自分の遊戯を最後までつづけよう。[16]」

「詩人たちでさえ、社会の礼節を重んじ、それに順応した生活に満足して、自分の経験からは一定の距離をおき、安全なところに立って、空想によって詩作することにしている。しかし、世界最高の精神の所有者は、感情に訴える各事実の、二重の意味、または、四重、百重、それ以上の意味を探ろうと、けっして休むことをしらなかった。オルフェーズ、エンペドクレス、ヘラクレイトス、プラトン、プルタルコス、ダンテ、スウェーデンボルグ、さらに彫刻、絵画、詩歌の巨匠たちが、そうであった。……元来、『時』と時が生みだすあらゆるものの川が流れ出てくる源泉は理想的で美しいということ、これはかくされた真理であるが、この真理にうながされて、

われわれは、『詩人』すなわち『美』に生きる人の本性と任務について考察し、かれが用いる方法と素材について、また、現代芸術の一般的現状について考察するようになる。[17]」

「人びとは詩が嫌いだと思いこんでいるが、実際は、みな詩人であり、神秘家である。[18]」

「言葉は化石になった詩である。大陸の石灰岩は微生物の外皮の集合体からできているのだが、これと同様に、言語は、イメージや比喩からできていて、これが、今日では、第二次的に使用されているので、大昔のその詩的な起源を思い出させなくなってしまっている。しかし、詩人が事物に命名するのは、かれがその事物を見るからであり、他人よりその事物に一歩近づくからである。[19]」

「詩人は、多少とも夢中になって語るとき、すなわち、『心の花をもって』語るときこそ、本心を十分に語ることができるということを心得ている。……世界の聖霊、偉大で沈着な造物主の姿は阿片や酒の魔術で現われるものではなく、荘厳なその姿は清純な肉体に宿る純粋な霊魂に現われるものである。われわれが麻酔薬のおかげだと思うものは霊感ではなく、偽りの興奮と激情である。[20]」

「詩人にとって、理想が真実になり、現実世界の印象が夏の雨のように、はげしく降りそそいでも、詩人の犯しがたい本性にとって、煩わしいものにはならない。詩人は、全地域を自分の荘園と領地にし、海を入浴と航海のために用いる。これには税金もいらなければ、人の羨望もまねかない。詩人は、森と川とをわがものにし、他人がただ借用し、下宿人になっているものを所有する。詩人こそ、真の、その土地の領主、大気の領主である。雪の降るところ、水の流れるところ、小鳥の飛ぶところ、晝と夜が薄明りのうちに合わさるところ、蒼天に雲がかかり、星がちりばめられるところ、その限界が透明になっているものの姿が見られるところ、天国への出口があるところ、危険と畏怖と愛のあるところ——そこには『美』があり、雨のようにつきることなく、詩人の上に

ふりそそぐ。そして、詩人が、世界中を歩きまわったところで、美を発見するための条件が熟していないところもないであろうし、悪条件のために美を発見できないところもないであろう。[21]」

「わたしは文学作品においても、一人の人間があらゆる書物を書いたように見えることに少なからず驚いている。それは、あたかも、編集長が報道員を各方面に配置し、たえず交代させるが、その記事に現われる判断と観点が一致しているので、それが、すべてを見、すべてを聞いた一人の紳士の手になったもののように思われるのと同じである。[22]」

「これらの活動のうち第一位は想像力によって生まれるとんぼがえり、魔術、蘇生などである。この力が眼ざめると、人は十倍も千倍も力を増すように思われる。それは無限の大きさという心地よい感覚を生み、一種の豪壮な心的習慣を鼓吹するのである。[23]」

「自負心と妥協してはならない。とにかく、より広くより気高くなりさえすれば、誰がそのことに口をはさむであろうか。ボズウェル流の嘲笑も気にする必要はない。自分の裾を気にして、大切がっているような見すぼらしい自負心よりも、一途な傾倒こそ偉大である。なによりも他を学ぶべきである。自分自身にとじこもらないでプラトン派になり、孤独の魂にならないでキリストの弟子になり、ひとりの博物学者にならないでデカルト派になり、孤高の詩人にならないでシェイクスピア崇拝者になるがいい。[24]」

「確乎とした決断力をもつ人こそ立派な人である。それゆえに、修養の目的は破壊することではなくて、すべての障害や不純物を除き、純粋な力だけを残すことである。われわれ学ぶ者は一つの型と決断力をもち、専門分野に精通しなければならない。[25]」

「まず第一に実用芸術について考えてみたい。この場合、全能の働きをするものは自然であり、人間の行為と

動作は、すべて自然という円球にともなう衛星にすぎない。自然とは宇宙に遍在する霊の代表者にほかならない。それゆえに、法則はつぎのようになるであろう。——芸術は自然の補助物であり、厳密に補助物たるべきものであると。[26]」

「役に立つかぎり、実用芸術においては、その作品は、一種の自然の連続になり、自然に低触しないためには、厳密に自然の法則に従わなければならない。同様に、美を目的とする芸術においても、その各部分は理想的自然に従わなければならない。……友人たちや、同じ町の人びとや、同じ時代の人びとだけによってではなく、すべての人びとによって賞賛されるべき作品で、外観ではなく修養にふさわしい眼識をもつ人から見て美とされるような作品を作ろうとする芸術家は、まず、個性をなくし、党派に属さず、風習にとらわれず、時代に煩わされない人で、空気が肺を循環するようにすべての人びとの心霊が心を循環している人でなければならない。[27]」

「この詩人はいつもの活動範囲外の高いところへ登り、新しい循環のなかに入った。世界の真髄がかれの骨のなかに存在し、豊かないろいろの『形相』がかれの知力のなかに注がれはじめた。そして、かれは許されて、古い絵の具壺のなかに絵筆を浸し、花や鳥や人の頬や、生きているような岩や、広い風景や、大海や、永遠に限りない空などを描いたのである。[28]」

「誠実な真理の追求者は誰からその観念が得られたかということについて煩わされることがない。誰でも、われわれに正しい思想を語ってくれる人は、その言葉が以前すでに語られたものであると言って非難する批評家の苦労をおろかしいものにしてしまう。[29]」

「創意とはなんだろうか。それは自分自身であることであり、われわれが見るものやわれわれの実体を正確に伝えることである。天才とは第一に感受性、すなわち、外界からありのままの印象を受けとる能力のことであり、

第二にこの印象を思想の法則に従って順序づける能力のことだと思う。[30]」

「海辺、二つの金属を接触させてみること、友人の前というよりもむしろ友人が近づくときや去るときの力の拡大感、真実にまじる虚偽、詩的創造の経験――これらは家にとどまっていては得られず、旅行においても得られない。こういうことは、ただある場所から他の場所へ移動すること、したがって、できるかぎりうつりかわる表面だけを手早く示すことにほかならないが――これらの経験は新鮮にする力の典型であり条件である。[31]」

「最高のものは純粋な知力によって事実を熟考することと知力を行動力へ完全に転換することという二つの状態を交互にとるべきである。たとえば、野獣的な活動性と天使的な洞察力、虎と賢人である。[32]」

「わたしがミューズに愛を求めるということと、ミューズがわたしに愛を求めるということには決定的な相違があるということに気づいた。それが老年を青年から区別する醜悪な相違である。[33]」

「正しい考えは、自然に、朝風のように訪れる。毎日のパンのように、日毎に、謙虚な奉仕にたいしてやってくる。それを探している人のところへやってくる。頭脳を無理に働かすことも正しく考えようと無理をすることも必要ではない。[34]」

「天才とは、自分自身や、対象を見つめている怠惰な天使ではない。天才はあくことなく表現を求める。……われわれの思想は、はじめ、われわれを所有しているが、後には、もしすぐれた頭脳をもっていれば、われわれが思想を所有するようになる。……真の学者はその思想を離れて立つか、または、腕の長さだけ、その考えを遠ざけて、展望を与える力をもつ人なのだとわれわれは信じている。[35]」

「知性を働かすための第一の法則は、思想本来の態度と行為を失わないで、思想を統制することである。それは神託である。すなわち、われわれは、せんさくしたり、訓練したり、強制したりしないで、それに従わなけれ

ばならない。[36]」

「霊感とは人間を作りあげる神のたゆみない努力である。[37]」

「人間のあいだの相違は、ある人においては想像もつかないほど早い記憶が後から追いかけて、飛んでいる木の葉を集めなおすという——あの怪しげなつむじ風と同じ速度で飛んで、ねたみ深い運命の裏をかくという点にある。[38]」

「心はせまい客間を出て、宇宙の真理の大空へ消え去って、消えたときと同じような状態には帰らない。人は自分がそのなかにいる恍惚を、ある程度まで、言葉のなかに運びこんでくるものである。[39]」

「心をよく理解する鍵は、それがひとつひとつを事実のリストに加えるということよりも一般化するということを知ることである。記憶が短時間で消え去ってしまうのは考えが浅いからである。[40]」

「心が行なうあらゆる一般化と深い洞察力があれば、追想もさらに深いものになる。今日の義務や事実にたいする新しい洞察力をもてば、われわれは過去を新たに所有することができる。[41]」

「鋭い観察力をもつ人をつれてきなさい。かれは新しい店、または古い聖堂に——かれにとっては同じものなのだが——あるいは、あなたを苦しめている新しい状況に灯をともして明るくしてくれるだろう。……洞察力のある人をつれてきなさい。かれは、シェイクスピアや、エスキュロスや、ダンテが見たと同じくらい多くの美と英雄と天才の一撃を自分のそばに発見するだろう。[42]」

「古典とはなんであろうか。古典芸術とは必然性の芸術であり、有機的である。近代的、すなわち、浪漫的芸術には、気まぐれとか偶然とかの焼印がおされている。これは癖とか気まぐれとか偶然とかが生んだものである。古典芸術はそのなかに、それ自身の法則と必然性とをもっている。君主政治は、一人の人間の気質と偶然の出来

事によって、すべてが左右される場合には浪漫的政治と称してもよいであろう。それにたいして、民主政治は、権力が国民から組織的に生まれ、国民にたいして責任をとるとき、古典的政治といえる。古典的なものは、古いものを見せてくれるが、浪漫的なものは新しいものをつけ加えてくれる。古典的なものは『こうあるべきもの』であり、浪漫的なものは『こうあればよいもの』である。前者は健康的で、後者は病的である。[48]」

（注）

① Journal, 1834. 12. 19.
② Ibid., 1835. 2. 16.
③ *Works*, Vol. 1, pp. 19–20.
④ *Ibid.*, pp. 22–23.
⑤ *Ibid.*, pp. 51–53.
⑥ *Ibid.*, p. 55.
⑦ *Ibid.*, p. 105.
⑧ *Ibid.*, p. 132.
⑨ *Ibid.*, pp. 134–35.
⑩ *Ibid.*, p. 181.
⑪ *Ibid.*, p. 213.
⑫ *Ibid.*, Vol. 2, p. 108.
⑬ *Ibid.*, p. 139.
⑭ *Ibid.*, p. 269.

㊱ *Journals*, Vol. 2, pp. 167–68.

㊲ Journal, 1839. 5. 30.

㊳ *Works*, Vol. 3, p. 4.

㊴ *Ibid.*, pp. 16–17.

㊵ *Ibid.*, p. 22.

㊶ *Ibid.*, p. 28.

㊷ *Ibid.*, p. 42.

㊸ *Ibid.*, p. 232.

㊹ *Ibid.*, Vol. 4, p. 17.

㊺ *Ibid.*, p. 29.

㊻ *Ibid.*, Vol. 6, p. 134.

㊼ *Ibid.*, Vol. 7, p. 40.

㊽ *Ibid.*, p. 48.

㊾ *Ibid.*, Vol. 8, pp. 40–41.

㊿ *Ibid.*, p. 192.

(51) *Ibid.*, p. 201.

(52) *Ibid.*, p. 289.

(53) *Journals*, Vol. 6, p. 492.

(54) *Ibid.*, Vol. 7, p. 190.

(55) *Works*, Vol. 12, p. 33.

㉟ *Ibid.*, pp. 43–44.
㊱ *Ibid.*, p. 45.
㊲ *Ibid.*, p. 59.
㊳ *Ibid.*, p. 95.
㊴ *Journals*, Vol. 9, p. 171.
㊵ *Works*, Vol. 12, p. 99.
㊶ *Ibid.*, p. 110.
㊷ *Ibid.*, p. 129.
㊸ *Ibid.*, pp. 303–04.

## 三

「修辞学。――わたしは説教を聞くたびに、眠くなるような文章のあいだで、歴史上の事実や伝記的な名前や、とくに客観的な例証が聴衆に深い感動を与えることに気づかないではいられない。なぜ説教者は、聴衆が一瞬（ねむくて）静まるという無言の懲罰に注目して、（これはかれが注意するまでもなく、しばしば聴衆のほうから示すことだが）聴衆の印象に残るのは、この特別の文句だけだということに、気づこうとしないのか。[①]」

「説教者は道徳性の調和にとりつかれた詩人でなければならないものだと述べてから――ユニテリアン協会を見なさい、詩的なところがありますかとわたしは言った。聴衆は微笑しながら首をふった。近頃の牧師はいわば実に平易な散文だと言える。かれはリウマチにかかった魂の病床にいれるこたつや便器のようなものである。吟

遊詩人の火のような眼と新鮮な言葉とがケンブリッジ式のつぶやくような発音と聖書の語法とに、とってかわらなければだめである。[2]」

「芸術の価値は分離という点にある。すなわち、ひとつの対象を厄介な多種多様の変化から引き離すという点にある。[3]」

「韻律法。——わたしは歩きながら一行十音節からなる四行詩の韻律などを心楽しく口ずさむことがしばしばある。……わたしは抑揚のなかに、雄壮な、とくにひどく感傷的な、または、哀愁をおびた一種不思議な魅力を発見して、このささやかな抑揚を、これがもつかぎりの力強い言葉で満たすことができたら、どれほど幸福であろうかとひとりごとを言うのである。[4]」

「さて、詩については、静かな暑苦しい日に静かな暑苦しい気分で畠へ行くとき、詩のもっとも美しい韻律と抑揚はまだ発見されていないのだということや、眼前で閃めく純粋な状態で、妖精の夢のような韻律が、われわれを魅惑するのであって、この韻律にくらべると、英詩のもっとも美しい韻律でさえも、賛美歌の調べ以上のものではないということをわたしは認めるのだと言いたい。もっとも微妙な終止法と調子の下げ方は韻律法のなかにはなくて、韻文よりも変化に富む豊かな雄弁術の拍子のなかにあると思う。[5]」

「この前の日曜日に、暖かい日ざしをうけながら岩棚に腰かけていると、大学時代の記憶がよみがえってきて愉快であった。わたしは青春の快よい感受性をとりもどすと、それに応じて、空気は鳴り響き、光はすっかりはしゃぎだした。いつでも祝祭日を作り出してくれるのは青年時代の追憶である。天気のいい日に馬に乗って行った子供たちの姿が思いだされる。ああ、あの頃には夢があった。ただ快よい調子があれば十分であった。思想や意味はどうでもよく、快よい調子のなかにすべての喜びがあった。そのために、わたしは詩を読み、詩を書いた。

この追憶に照らしてみると、言葉はどうでもよく、調子がすべてだという音楽家たちの理論がわかる。風に鳴る弦の音を聞いて、わたしはどれほど喜んだことであろう。今でもそうである。コリンズの『風によせる賦』やグレイの『イートン高校』にわたしは今でも素晴しい若さを感ずる。ムーアのあまり意味はないが調子のいい詩のおかげで、わたしは随分楽しい時をすごしたものだ。[6]」

「なぜ、ひどく貧弱な地方大学さえも、わたしに修辞学の教授を頼んできたことがないのであろうか。わたしは雄弁家ではないが、雄弁家を育てることはできたろうと思う。[7]」

「詩で重要なものは調子である。ローエルの新しい詩のいくつかを読んでいたが、かれは思いがけなく進歩している。しかし、それは技法と勇気という点においてであると思う。進歩は詩の調子においてよりも才能の働きにおいてであって、かれは抑えがたい内部の衝動よりも願望や野望を表現している。実は内部の衝動こそ新しい詩の信頼できるしるしであり、それは分析できないもので、コリンズの頌詩、グレイ、ワーズワース、ハーバート、バイロンなどの頌詩の価値を高めているものである――それは華やかなところとか詩行においてよりも、全体の調子において感じられる。あたかも、鈴の音や低い口笛やぶーんと鳴く声やぶんぶん唸る声にあらわれる一種の韻律なりが――詩人は日没を眺めたり考えたりしながら、まず第一にそれにかれの歩調を合せるのだが――その詩の発端の形式であり、詩全体を支配しているようである。[8]」

（注）

① Journal, 1836. 12. 10.

② Ibid., 1838. 4. 1.

③ *Works*, Vol. 2, p. 354.

④ *Journals*, Vol. 3, p. 551.
⑤ *Ibid.*, Vol. 8, p. 33.
⑥ *Ibid.*, p. 125.
⑦ Journal, 1862. 3.
⑧ Ibid., 1868. 12. 9.

## 四

「わたしはブライアントやこれらの青年たちに、世界のすぐれた詩は、はじめから倫理的であったということや、現代の完成した人の心もそういう詩を生む傾向をもっているということを話した。ワーズワースの真価は、かれが社会と英文学との人心をあやまる多くの影響をのり越えて、真に偉大なものを見たという点にある。かれには仕上げる力はないが、その詩は正しい道を踏んでいる。[1]」

「完全美は完全善であるとは、遠いむかし発見されたことであり、道徳律の不思議な調和から発達したことである。[2]」

「雑誌『ダイアル』は廃刊の危機に立っているが、わたしがその生死をきめなければならないらしい。……しかし、それを『人道と改革を唱える人びと』の手に渡したくはない。かれらは文学と詩をふみにじるからだ。また、『学者先生たち』は、死んでひからびているから、これも困る。[3]」

「物質的な美しさは消滅するし、また、あきがくるものだ。知的な美しさも、季節や、年齢によって、感動することもあり、しないこともあり、その喜びに干満がある。しかし、道徳的な美しさはきわめて美しく、しかも

不滅で完全である。幼児も父親も『神』も『天使』も『人間』もそれを愛する。……ミルトンの『コウマス』を理解できるほどの人なら、それを読んで、それが賛美する敬虔な情緒に感動しないではいられないはずである。[4]」

（注）

① Journal, 1838. 4. 20.

② *Journals*, Vol. 3, p. 286.

③ *Ibid.*, Vol. 6, pp. 205–06.

④ *Ibid.*, Vol. 8, p. 496.

## 五

「目に見えるものと思想のあいだには、このような根本的な対応関係があるために、必要なものしかもたない未開人は、象徴によって会話をする。歴史をさかのぼると、言語は次第に絵画的になるが、歴史の黎明期までくると、言語はすべて詩歌である。すなわち、すべての精神的な事実は、自然の象徴によって現わされる。同一の象徴が、すべての国語の最初の要素になっていることがわかる。なお、最近発見されたことであるが、すべての国語の慣用句は、ひじょうな雄弁と力とをもつ文章においては、互いに類似している。そして、これは最初の言語であるが、最上のものでもある。言語が自然に直接依存しているという事実、自然の現象が人間生活上の事柄の象徴に変わるという事実、これはわれわれを感動させる力を失うことがけっしてない。厳然とした農夫や開拓者の話には、きびきびしたところがあり、その話は人びとに好まれているが、それはこの象徴のためである。[1]」

「自分の思想を適当な象徴に結びつけて表現する力は、性格が素朴なとき、すなわち、真実にたいする愛をも

ち、真実をすべて伝えたいという願いをもっているときに発揮される。人間が堕落すれば、それにつづいて言語が堕落する。[2]」

「わたしは、象徴に魅力があることを知っている。誰が自然を愛し、誰が愛せないのだろう。自然とともに生活するのは、詩人たちや、教養のある暇な人だけなのだろうか。そうではない。猟師も、農夫も、町で働く人たちも、みな自然を愛している。ただ、かれらは、言葉によってではなく、かれらの選んだ生活によって、自然にたいする愛情を表明しているのである。[3]」

「人間の自然にたいする愛情には、このような精神性と神秘性があるが、こういう性質から、あらゆる人間は、象徴を使用しなければ承知できなくなる。さまざまの学派の詩人や哲学者が、かれらの象徴に夢中になっているが、これに劣らず、一般の人びとも自分たちの象徴に夢中になっている。われわれの政党のあいだでは、バッジや象徴の力は、たいしたものである。[4]」

「微小なものが、偉大な象徴と同様に役に立つ。法則を表現する象徴がありふれているほど、いよいよ辛辣なものになり、ますます長く記憶にのこる。必要な道具を運ぶときに、できるだけ小さな箱や入れものを選ぶのと同じことである。[5]」

「われわれの用いるわずかの象徴のもつ意味さえも、われわれは研究しつくしてはいない。この象徴を、おそろしいほど単純に用いることができる詩は、長くなければならないということはない。一語一語が、かつては詩であった。一つ一つの新しい関係が、新しい言葉である。[6]」

「世界はこのように、言葉に表現されようとして、精神の支配下にあるのだから、詩人とは世界を明確に表現できる人のことである。生命は偉大で、人を魅惑し夢中にさせるとしても、すべての人びとは象徴によって生命

に名が与えられていることを知っていても、かれらには、その象徴を、独創的に用いることはできない。われわれは象徴であり、象徴のなかに住んでいる。労働者と労働と道具、言葉と事物、生誕と死、すべては象徴である。われわれは、象徴に共感し、事物の経済的なこの利用法に夢中になっていて、象徴が思想であることを知らない。[7]」

「詩人は、生命のために形を用いるのであって、形のために形を用いるのではない。これが本当の科学である。……こういう科学の力によって、詩人は『名づける者』、すなわち、『言葉をつくる者』になり、あるときはその本質によって、事物に命名する。すべてのものに、固有の名を与え、他と同じ名をつけるようなことはない。こうして、分離と境界をはっきりさせることを好む知性も満足させられる。詩人がすべての言葉をつくったのである。それゆえに、言葉は歴史の古文書保存所であり、あえて言えば、詩神の墓である。[8]」

「しかし、想像力の特質は、流れることにあり、凍ることにはない。詩人は、色彩や形を見て立ち止まらずに、その意味を読みとる。かれはまた、一つの対象の意味を読みとりながら、休んでしまわずに、その対象を、かれの新しい思想を説明するものとして用いる。ここに、詩人と神秘家との相違がある。神秘家は、一つの象徴を一つの意味に固定させるが、その意味は、一時は真実なものであっても、まもなく、古くなり、まちがいになる。[9]」

（注）

① *Works*, Vol. 1, p. 29.

② *Ibid.*

③ *Ibid.*, Vol. 3, p. 15.

④ *Ibid.*, p. 16.

⑤ *Ibid.*, pp. 17–18.
⑥ *Ibid.*, p. 18.
⑦ *Ibid.*, p. 20.
⑧ *Ibid.*, pp. 21–22.
⑨ *Ibid.*, p. 34.

## 六

「リディアンは子供の頃の宗教的な恐怖を覚えているが、その頃はエドワード・ヤングが彼女の昼と夜の思いをほのかに色づけ、ウィリアム・クーパーの疑惑がそのまま彼女の疑惑でもあった。稲妻が光ると今にも大火災が起こりそうに思え、通りの方で物音がすれば最後の審判の轟音かと思ったものだ。わたしもビーコン通りに住んでいた頃、ラテン語学校でこれに似たことを経験した。後になれば、すぐに理解できるこのことは、わたしが大学に入学してから書物と詩と哲学によって清められ、文学というより純粋な形になって現われた。こういう精神的な危機は歯が生える時期や思春期と同様に、誰の心にも一度はなんらかの形で動揺をひき起こすものである。その頃、リディアンは墓辺の詩に恐怖を覚えたそうだ。[1]」

「宗教家と文学者とのあいだの大きな相違——ハーバートのような詩人とポープのような詩人とのあいだの相違、スピノーザ、カント、コールリッジのような哲学者とロック、ペイリー、マッキントッシュ、スチュアートのような哲学者とのあいだの相違——すぐれた雄弁家だと認められている世慣れた人びとと無限の思想のもとに、なかば気違いじみた予言をするあちこちの熱烈な神秘家たちとのあいだの相違——それは、一方は心の内部から、

経験によって、事実の味方、事実の所有者として語り、他方は心の外部から、単なる傍観者として、おそらく第三者の証言によって事実を知ったものとして語るということである。[2]」

（注）

① Journal, 1837. 8. 20.

② *Works*, Vol. 2, p. 287.

## 七

「自然の形態を見るだけでも喜ばしい。自然のうちにみられる形態と活動の影響は、人間にとって、きわめて重要なものであるため、そのもっともありふれた働きにおいても、この影響は、実利と美との境界線にあるように思われる。[1]」

「わたしの家のむかいにある丘の頂上に立って、夜明けから日の出まで、朝の眺めを見ると、天使もいだくかもしれないような感動を与えられる。……夜明けはわたしのアッシリアであり、日没と月の出はわたしのパフォスであり、人間の想像も及ばない妖精の国である。白昼は感覚と悟性をもつわたしのイギリスになり、夜は、神秘的な哲学と夢をもつわたしのドイツになろう。……自然が語ろうとしたものはなんであったろうか。水車小屋のうしろの谷の生気あふれる静けさには意味がないのだろうか。ホメロスやシェイクスピアといえども、わたしのために、言葉に表現しなおすことのできないような意味がないのだろうか。葉のおちた木は、落日のなかで、火焔の螺旋になり、背後の東の空は青味をおびている。星形の枯れた花、霜におおわれているひからびた茎や切

り株、こういうものが集まって沈黙の音楽を奏している。[2]」

「しかし、美しいと見られたり、感じられたりするこの『自然の美』は、美のなかでもっとも小さな部分である。一日のいろいろな眺め、露の朝、虹、山、花ざかりの牧場、星、月光、静かな水面に浮かぶ影、こういったものは、あまり熱心に求めると、ただの眺めになってしまい、現実性をもっていないために、われわれは愚弄される。家から出て月を眺めると、月は単に光るものにすぎない。[3]」

「すべての人びとは、ある程度、世界の外観によって感銘をうける。ある人びとは、そのために喜びさえもつのである。美にたいするこういう愛は『趣味』である。ほかの人びとは、これと同じ愛を、あまりにももっていすぎるために、賞賛するだけで満足せずに、新しい形式のなかに、この愛を具体化しようとする。美の創造が『芸術』である。芸術作品の制作は、人間性の神秘に光を投げかける。芸術作品は、世界の抜粋であり、要約である。これは、細密画による自然の結果であり、表現である。[4]」

「魂はなぜ美を求めるのかということには問うことも答えることもできない。そのもっとも大きな深い意味において、美とは、宇宙の表現である。神は純粋に美しいものである。真、善、美は、同じ『全体』の異なる面にすぎない。しかし、自然のなかに現われた美は、窮極的なものではない。これは、内的で永遠の美の使者であり、これだけでは実質的で十分な善ではない。これは、一部分として存在すべきもので、『自然』の窮極の目的の最後の、あるいは最高の表現ではない。[5]」

「春がふたたびめぐってきて、美しい衣装をくりひろげはじめた。春は野の花の長椅子に腰をおろしたり、丘へ行って歌手たちを呼び集めて、美しい声で春の賛歌をうたわせる。ミューズの九神は崇拝者たちの書斎や贅沢な冬の住居を出て、パルナッサス山に登り、草庵を結んだり、泉の氷をとかしたりする。カスタリアの霊泉は飛

沫を高くあげながら楽しそうに流れている。猟師と羊飼いは岩の上にいる。谷は楽しい角笛に答えてこだまする。もちろん、『詩人』は、無数の『自然』の快よい調べが囁りかけるのを耳にしながらさまよい歩いている。春の微風のやさしい魅惑的な感触の贅沢なことよ。それがもたらす美のすばらしいことよ。たとえば、春の微風は、心を嬉しい思いで満たしてくれるあの倦怠感を生み出してくれる。これは活発な楽しみにもかえがたいものである。なぜなら、この魔力のつづくかぎり、なにもなしとげることはできなくても、心をすり切れた古い瞑想から解放し、人生を新鮮にし、想像の魔力を置土産にしてくれるからである。そして、この想像の魔力から、われわれの心は見事な姿や華やかな空想を作りあげる。[6]」

「わたしは『時』を楽しむ。共有地を通りすぎるときなど、わたしの態度は、きわめて散文的だが、心は激しい詩的な喜びを感ぜずにはいられない。わたしは田舎に住んでいることを神に感謝する。[7]」

「わたしは日没時にリプリー博士の丘の頂上に登って、この土地の守護神にたいして誓いを新たにした。いくらかの畏怖の念が、荘大で厳粛なものが、遙かに遠くでわたしを囲んで輝く美とまじりあった。太陽が雲のうしろに沈みかけている西空に、ひとつの輝く洞窟が空間の荒野に横たわっていた——輝きのない『静かな光』の沈殿したものが横たわっていた。そのとき、わたしは、あの河が神の愛のように、灰色の過去から緑の未来に向かって旅立つのを見たのである。[8]」

「大海がひじょうに深いならば、われわれが、その上を、宗教的な気分で徘徊するのも不思議なことではない。伝説や神話の美しさは、物語の意味が重要であるということを証明している。詩人にとっても、またほかの人びとにとっても、そうであって、自然の魅力を感じとるかぎり、すべての人は詩人であると言ってもよいであろう。宇宙は思想の祝典であり、すべての人びとが、その思想をもっているからである。[9]」

「神の生命からはずれ、遠ざかることが、ものを醜くするのであるから、ものを、もう一度、自然と全体に密着させる詩人――人工的なものや自然を冒瀆するものすら、深い洞察力によって、もう一度、自然に密着させる詩人は、きわめて不愉快な事実も、しごく容易に処理してしまう。詩の読者は、工場や鉄道を見て、風景の詩情は、これではぶちこわしだと思う。それは、技術によって造られたこういうものが、詩の読者の見解では、まだ神聖なものにされていないためなのだが、詩人は、工場や鉄道も、蜂の巣や幾何学的な蜘蛛の巣と同様に、偉大な『秩序』のなかにあると見る。[10]」

「そこで、詩人の魂が、円熟した思想をもつようになると、自然は、詩人の魂から、魂の詩と歌とを引き離して、送り出すのである。[11]」

「自然は、新しい個人を創造するときに、安全ということよりも、より高い目的をもっている。すなわち、魂が『上昇』して、さらに高い形に移ることを目的にしている。わたしは、若いころ、今、公園に立っている青年像をつくった彫刻家を知っていた。今でもおぼえているが、かれは、かれを幸福にしたもの、不幸にしたものについて、直接に語ることはできなかったが、間接に表現することによって、立派に語ることができた。[12]」

「小鳥のつがいは、牧歌であり、われわれの牧歌のように退屈ではない。嵐は、あらけずりのオードであり、虚偽や誇張がない。作物の種をまき、刈りとり、これを納屋に収める夏は、叙事詩であり、続々とすばらしい出来栄えの詩が、第二部、第三部と続いている。こういう自然の歌声を調整する調和と真理が、われわれの精神に入ってこないことがあろうか。そして、われわれが、自然の創作力に協力できないことがあろうか。[13]」

「詩人の生活態度は、素朴なものでなければならず、平凡な影響力に接しても、感動するものでなければならない。詩人の明朗さは、日光の賜物であり、霊感を受けるには、大気があれば十分であり、水を飲むだけで酔い

心地になるというふうでなければならない。[14]」

「芸術作品が人に与える喜びは、作品のなかに、『自然』を作った精神が再び活動しているのを認めることから生まれるということである。芸術作品と『自然』が作るものとのあいだの相違は、後者が有機的に増殖するという点にある。芸術作品はそうではないが、知力に強く作用することによって精神的には多くの子孫を生むのである。このようにして、すぐれた芸術作品を研究すれば、『自然』の美にたいするわれわれの理解力が鋭くなるし、『自然』と芸術作品の両者を通じて、類似のあることがわかり、偉大な芸術作品を観照すると、われわれの心は宗教的と言えるような状態にひき入れられる。[15]」

「一途に未来や自然の深みに驚嘆して、そのなかへひきこまれ、それらの法則にわれを忘れる詩人は新鮮な魅力でわれわれを元気づけてくれるものである。しかし、このすぐれた天才は、わたしに天才というものを信用させなくしてしまう。こういう人が（オールコットのこと）これ以上に多数いることはご免こうむりたい。[16]」

「年老いてやつれきった大地と、それが生んだ昔ながらに変りばえのしない生産物に、『露』は毎朝、『芸術家』である神の御手になる最近の作品の目もくらむばかりの輝きを与えて一新してくれるのである。[17]」

「野原や森をぶらぶら歩きながら、歩いているということが、とるにたりない夢にすぎないというほど思索にふけっている詩人は、わしの鋭いなき声、からすやたいしゃくしぎのなき声が、かれの頭のそばで楽しい思索を破らなければ、けっして正しい考えに目覚めることはない。いな、詩人のもっとも素晴しい叙情詩は、この不均衡の血統から生まれてきたのである。物質の小鬼は霊魂のうえに、このような子供、美しい神の娘を生んだのである。[18]」

(注)

(1) *Works*, Vol. 1, p. 16.

(2) *Ibid.*, pp. 17–18.

(3) *Ibid.*, p. 19.

(4) *Ibid.*, p. 23.

(5) *Ibid.*, p. 24.

(6) Journal, 1820. 4. 2.

(7) Ibid., 1834. 12. 8.

(8) Ibid., 1838. 9. 16.

(9) *Works*., Vol. 3, p. 15.

(10) *Ibid.*, pp. 18–19.

(11) *Ibid.*, p. 23.

(12) *Ibid.*, p. 24.

(13) *Ibid.*, pp. 25–26.

(14) *Ibid.*, p. 30.

(15) *Ibid.*, Vol. 7, p. 51.

(16) *Journals*, Vol. 7, p. 33.

(17) *Ibid.*, p. 561.

(18) *Works*, Vol. 12, p. 466.

八

「沈黙、堅実、厳密な抽象というような点において、学者はひとりで自分を保持しなければならない。観察に観察を重ね、疎まれること、誹られることを忍び、時節到来をまたなければならない。もし、学者が、今日、なにかを真に見たと満足できれば、この上ない幸福である。成功はすべて正しい歩みを踏んでくる。それというのは、本能はたしかに、学者を促して、かれが考えていることを兄弟に語らせるからである。こうして、自分の心の底に降りてゆくことが、実際には、あらゆる人びとの心の底に降りてゆくことになるということをかれは知るのである。[1]」

「なによりも健康が必要である。頭脳が冴えているときに、まったく覚醒しているときに、われわれはもっともよく覚えることができる。[2]」

「元来、詩、音楽、彫刻、絵画などは、すべて『愛国主義』と『宗教』に奉仕するためのものであった。彫像は礼拝されるべきものであった。絵画もそうであった。詩は信仰の告白であった。生きた信仰がヨーロッパの寺院を建てたのだが、誰がいまブライアントの詩やグリーノウの彫刻やオールストンの絵画を見たいと思うであろうか。民衆はそれらをけっして見ない。アメリカ国民の心は違う方向に進んできた——すなわち、財産を作るという方向にである。[3]」

（注）

① *Works*, Vol. 1, p. 103.

㊸ *Ibid.*, Vol. 12, p. 106.

㊹ *Journals*, Vol. 10, p. 168.